平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」
事業実施報告書

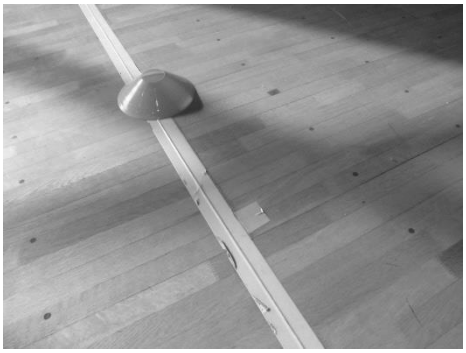
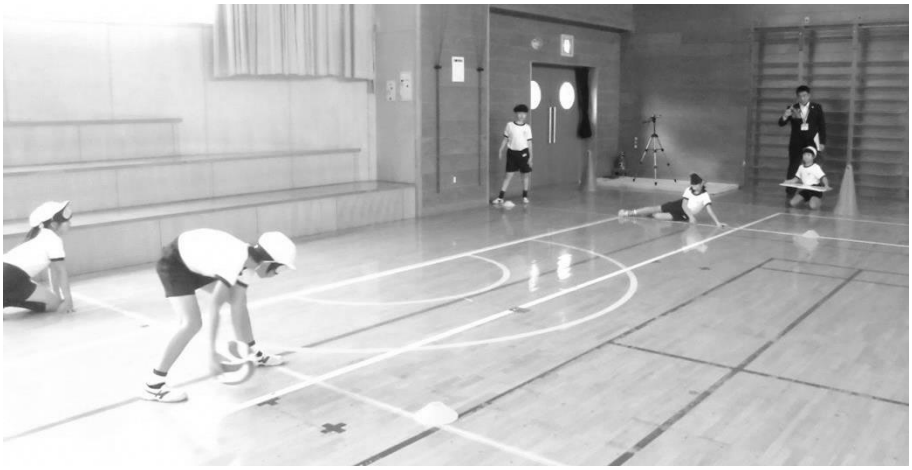
Ⅰスポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱマナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲスポーツを通したインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴスポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名　【千葉市】

1　実践テーマ	【　Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ　】
2　実施対象者	学校名：千葉市立蘇我小学校 対象学年：第２学年 クラス（人数）：３クラス　１００名
3　展開の形式	（１）学校における活動 ①教科名（体育科・保健体育科） ②行事名（　　） ③その他（　　） （２）地域における活動 ①イベント名（　　） ②その他　　（　　）
4　目標（ねらい）	モデル校での実践等を通して、体育・保健体育の学習を充実させ、子供たちが、よりスポーツを好きになり、生涯にわたって運動に親しむ資質を育むこと、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図ることを目的とする。
5　取組内容	＜道すじ＞ 1：つながる運動（２人でころがしゲーム） 0→45：オリエンテーション ねらい① やさしいルールで「ころがしボールゲーム」を楽しむ。 （目かくし・守りなし） ねらい② 目かくしをしたり、ゴールに守りをつけたりして「ころがしボールゲーム」を楽しむ。 まとめ ※パラスポーツへの理解関心を高めるとともに、多様性を受け入れ、共生社会の実現を目指そうとする姿を育むため、オリエンテーションや配当時間外の時間を使い、ゴールボールの実際の競技映像を見せて競技の様子をつかませたり、ゴールボールのルールを紹介したりした。 ＜手だて＞ （１）ボールについて ・ねらい①では、様々な大きさ・重さのボールを選択できるようにした。ゲームの中でそれぞれのボールの特徴に触れさせた。 ・ねらい②では、目隠しをするため、ころがした際に音が鳴るよ

	う工夫する。その際、体にあたっても痛くないよう、ボールは①鈴入りソフトタッチボール　②ソフトバレーボール（高学年用）をスーパー等のビニール製手提げ袋に入れたもの　のいずれかを使用した。 （２）アイマスクについて ・目隠しをする際、アイマスクを共同購入費で一括購入し、使用した。その際、衛生面から、貸し借りはしないように指導し、毎時間ビニール袋などに入れて個人で管理させた。 （３）場について ・ねらい①は、ゴールとなるカラーコーンの間の間隔の大小や、投げる距離によって得点のルールを設定できるようにした。 ・ねらい②は、投げる距離によってのみ、得点のルールを設定できるようにした。 ・ボールの転がる音を聞きながら動くことになるため、周囲が静かにしなければならないときは、実況・補助係の児童が「おしずかに」と言ってプラカードを掲げ注意を促すこと、その際は、周囲の児童は口を閉じることをルールとして、教師が指導した。
６　主な成果	（１）関心・意欲面 ○授業に対して大変意欲的に取り組む姿勢が見られた。特に、目隠しをしてゲームに取り組むことに対して楽しみを見出した児童が多くいた。 ○ねらい②では、自分の転がしたボールの軌跡がどうだったかを友達に尋ねたり、同じチームの児童に「ここを狙うといいよ」などと教え合ったりする姿が見られた。 （２）思考面 ○ねらい①からねらい②へ移行したところで、どのように投げたら得点できるかを工夫する姿が見られた。例えば、そっと足音を消して移動し、ゴールの端を狙う児童や、勢いをつけてボールを転がす児童などが見られた。 守りについても、どのタイミングで体を投げ出して守ったらよいのかを試行錯誤する姿が見られた。

	（３）技能面 ○事前調査では６ｍ離れた場所から３ｍ幅のゴールにボールを確実に転がし入れることができた児童（２回投げて２回とも入る）が全体の 18.2%であった。事後の調査では、72.7%の児童が確実に転がし入れることができた。また、事前では 21.2%の児童が一度も転がし入れることができない、もしくはボールがゴールに届かない状態であったが、事後では 3.0%にまで減少した。 ○事後調査では、ゴールまでの距離を８ｍ、10mにしての調査も行った。その結果、８ｍでは 54.5%、10mでは 33.3%の児童が確実にゴールへボールを転がし入れることができた。 （４）その他（オリパラアンケートより） ○オリンピックを「とてもよく知っている」と回答した児童の割合が、事前では、42.4%であったが、事後では 60.6%に増えた。また、パラリンピックを「とてもよく知っている」と回答した児童の割合が、事前では 27.3%であったが、事後では 45.5%に増えた。自らの経験や、映像資料などを通してより深く理解したと考えらえる。 ○「自分に良いところがあると思うか」という問いに対して、「とてもそう思う」と回答した児童の割合が事前では 39.4%であったが、事後では 54.5%に増えた。また、「むずかしいことでも挑戦していると思うか」という問いに対しては、「とてもそう思う」と回答した児童の割合が事前では 72.7%であったが、事後では 81.8%に増えた。自分の役割が明確だったこと、友達と深く関わったこと、目隠しをしてボールを転がすという、児童にとっては「難しいと思ったこと」にも取り組んできたことなどから、単元を通して自尊感情が高まったと考えられる。
７　実践において工夫した点（事業の特色）	○コートの数を増やして、ねらい①では、チームに１つのコートを、ねらい②では、１対戦に対して２つのコートを割り当て、運動量の確保を図った。特に、ねらい②においては、同時に２つのゲームを進めることができたため、児童の待ち時間が減り、十分に運動量を確保することができた。 ○授業が進むごとに、ボールに勢いをつけようとするあまり、ボールを放り出してしまうようになった。「転がす」ということを常に意識させるようにした。 ○守り・攻めともに、しゃがんでライン上を左右に動くことを促した。そのことで、攻守に幅が生まれ、思考面が高まった。 ○喜びの共有や、動き方の教え合いなど、会話や声が必要となる場面は、小さな声で話したり、ボディランゲージで感情を表現したりする方法を教え、促した。また、静かにするよう促す方法としてプラカードを掲げ、「おしずかに」というようにした。体育の授業以外でも、日常生活で活用する姿が見られた。

8　主な課題等	○評価について、特に、技能面の評価については、「ねらった方向へまっすぐに転がす」「目隠しをした状態でゴールを守る」としたが、これが妥当かどうか、検討が必要である。 ○ひも入りのラインテープを２週間程度体育館の床に貼っておくことになる。そのため、施設開放で利用する団体や他学年の授業の支障になることがあった。また、養生テープを用いたが、摩耗に弱いため、ひもが抜けてしまったり、はがした跡が残ってしまったりした。 
9　来年度以降の実施予定	○低学年「多様な動きをつくる運動遊び」の「用具を操作する運動遊び（用具をつかむ、持つ、降ろす、回す、転がすなどの動き）」の一つとして、１学年で本単元ねらい①の「目隠しなし、守りなしの転がしボールゲーム」、２学年で本単元ねらい②の「目隠し、守りありの転がしボールゲーム」に取り組むことを検討している。 ○各学年のボール運動領域の中に、「パラスポーツ」という時間を数時間設け、それぞれのボール運動の単元終了後に、経験させるという方法も検討している（例：低学年＝ゴールボール、中学年＝シッティングバレーボール、高学年＝車いすバスケットボール　など）。